

**国際性** 日本は少子高齢化問題に直面しており、企業は市場拡大のために、大学は学生数確保のために海外に目を向ける必要性に迫られている。しかし、このような問題や国際化の必要性は昨今に叫ばれ始めたことではない。私の学生時代から、ニュースのみならず就職活動における企業説明会でも口を揃えたように国際化が話題であった。当時学生であった私は「学生のうちに世界を自分の目でみてやろう」と思い立ち、海外渡航歴は皆無であったが、2か月間かけて一人でアメリカをバスで周遊した。当時、20歳であった自分にとっては勇気のいる挑戦であった。英語力はさほど向上しなかったが、行動力や積極性などなどの雑多な能力が磨かれ人間として大きく成長することができたと思う。これを機に、3か月に渡るチェコでのインターンシップを含めてこれまでに60カ国以上を訪れ、感受性の豊かな若い時期に海外の文化や価値観、多様性を肌で感じた。

**社会と大学での気づき** 私は現在、大学教員として働いているが、それ以前は10年間ほど国立の研究開発機関で勤務した。その間、継続的に国際会議や旅行などで海外渡航をした中で日本企業の存在感が海外で、特に中国や韓国と比べて、みるみる薄れつつあることを肌で感じた。ニュースや雑誌等でも同じ事が憂われている。昔、例えばエジプトやシリア等の中東諸国では日本製電気製品が市場を席巻しており、日本人の私を見ると「サンヨー、トシバ、三菱」などと日本メーカーの名前を連呼して近づいてくる外国人が多く、面白おかしく観察していた。しかし、現在では片言での日本メーカーの名前を聞くことはほとんどなくなってしまった。最近訪問した中央アジアのウズベキスタンでは、町はサムスの看板で溢れ返っている。その光景を見て日本企業の没落を嘆くと同時に、このような所にまで進出する韓国企業の積極性に感心した。主要な国際会議での論文発表件数も中韓に逆転されることが多くなったことから察するに、単に企業の経営戦略の問題ではなく、日本人の姿勢に何か課題があるように思えた。日本人の国際性、エネルギーや活力の問題であると感じた。

フィリピンを訪れると、学生らしき若い韓国人を地方都市でも見かけることが頻繁にある。現地人に尋ねると、語学留学をしている学生達とのこと。フィリピンは英語が公用語であり、ラジオやテレビでは英語が用いられることも多く、映画館では字幕なしで上映されている。積極的に語学留学する学生はエネルギーと向上心に溢れており、そのまま企業の活力や業績にも繋がっている感じる。また、異文化に身を投じることで国際性を育てているのであろう。中国人留学生については欧米のみならず、日本各地の地方大学でも存在感は十分である。私の研究室メンバーもおよそ20%が中国人留学生であり、彼ら無しの日常は考えられない。

**次なる挑戦** 企業のみならず日本自体が技術者や学生に対して、語学力に加えて「海外の文化や価値観に興味を持ち柔軟に対応する姿勢」やチャレンジ精神を求めていると強く感じる。また、これこそが真の国際性であると経験から今は言える。専門知識の教授は当然として、国際性を身に着けた学生を社会に送り出すことは大学の教育者としての責務である。昨今では大学自体が国際化プログラムを準備しているが、学生の視点からすると物足りない。そこで、研究室でスカイプ英会話学習ができるシステムを構築した。学生は毎日、フィリピン人講師と個人レッスンをやっている。現地留学には劣るが、効果は上々で学生達の満足度は高い。更に、大学院生は卒業までに英語論文を執筆し国際会議に1度は参加させるようにした。これは自分にとって非常に大きな挑戦である。論文投稿期日が迫ると、24時間休み構わず学生から来る論文添削依頼により追い詰められるというのが大学教員にとっては恒例であり、5名の院生を同時に相手した時は「針のむしろ」の意味を身をもって理解した。4年間でのべ23名の学生を参加させた。現在の達成率は95%。継続こそが真の挑戦である。

数年前、「発展著しい東南アジアの言語の習得」を自身に対する挑戦として課し、独学でタイ語検定試験に合格し、簡単な日常会話と基礎的な読み書きができるまでに至った。しかし、現在は学習する言語の変更の必要性に迫られている。当然、中国語である。中国人留学生とのコミュニケーションのためのみならず、自分自身が持続的に学習する姿を模範として学生に示すことが出来る。挑戦は自身のためのみならず、である。